

# 旭労災病院ニュース

病院情報誌 第 21 号 平成 19 年 8 月 1 日発行

発行所：旭労災病院

〒488-8585

尾張旭市平子町北61番地

TEL 0561-54-3131

FAX 0561-52-2426

<http://www.asahih.rofuku.go.jp/>

## 脳神経外科新設のご挨拶

脳神経外科部長 楠瀬 睦郎



本年5月から、春日井市の東海記念病院より旭労災病院に赴任してまいりました楠瀬です。脳神経外科は、本年4月まで非常勤医師が週一回だけ外来診察を行っておりましたが、5月より毎日診療に携わることになりました。

私は東京で生まれ育ち、昭和61年富山医科薬科大学(現・富山大学医学部)を卒業し、脳神経外科の門をたたきました。大学の人事で平成10年に東海記念病院に着任し、初めて愛知県の医療に携わらせていただくことになりました。主に脳血管障害や頭部外傷などの脳神経外科領域における救急医療・急性期治療を主に行って参りました。

突然意識障害に陥った、手足が麻痺して動けない、喋れなくなった、など脳卒中の疑いのある患者さんや、交通事故などで頭を強く打った患者さんに、速やかに検査や治療が受けられるよう準備を進めております。

ところで脳血管障害でもっとも多い疾患は脳梗塞ですが、一昨年より認可されたTPA静注療法は、重症脳梗塞の患者さんには非常に有効です。私は今まで十数例ほど同療法の経験がありますが、この治療はまさに時間との勝負であります。すなわち発症3時間以内にすべての診断が終わって、投与可能な状態でないと治療ができません。そのためには、周囲の人や救急隊の方、診療所の先生方のご協力が必要です。さらには、迅速な対応と診断が可能で、いざという時にも手術対応のできる病院で治療を受けることがのぞましいと考えております。当科も、TPA療法で一人でも多くの患者さんを救えるよう、邁進していく所存であります。

旭労災病院は歴史がありますが、脳神経外科はできたばかりです。常勤医もまだ私一人で、これから徐々に設備を整え、スタッフを育てていく発展途上の段階です。まだまだ対応しきれない点もあろうかと存じますが、地域に根ざした脳神経外科を作っていこうと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

## シェーグレン症候群の臨床像



膠原病内科部長  
森 康一

シェーグレン症候群は関節リウマチ、SLEと並んで大変患者数の多い膠原病ですが、その臨床像についてはよく知られていないのが実情です。血管炎の所見を有する患者さんで乾燥症状および所見が一定の診断基準を満たした場合シェーグレン症候群と診断され治療の対象となる一方、診断基準にあてはまらない場合、原因不明の膠原病としてあつかわれているケースがかなり多いのではないかと思います。海外の文献ではシェーグレン症候群の診断における超音波検査の有用性が謳われておりますが日本では十分浸透しているとはいえません。唾液腺超音波像にてあきらかなシェーグレン症候群の画像を呈しておりガムテストなども陽性でありながら乾燥症状に気づいていない患者も多く存在します。典型的な症例としては高熱を主訴に入院され、当日におこなった超音波検査でシェーグレン症候群と診断、翌日より抗生剤不応性の胸水、肺野浸潤影が出現してきた21歳女性のケースがあります。高熱が持続するため他の膠原病の合併を精査するも指摘できず、一方自己抗体はSSA,SSB抗体はもとよりRNP抗体も強陽性と血管炎の所見が裏付けられました。後日ガムテスト陽性で唾液分泌障害はあきらかでしたが自覚症状はきわめて軽微であり、問診では陰性でした。

当膠原病内科には現在20名以上のシェーグレン症候群の患者さんが通院されておりますが、乾燥症状以外に関節炎(シェーグレンでは往々にしてRF陽性であり関節リウマチと誤診しやすい)、紅斑、間質性肺炎、自己免疫性甲状腺疾患、自己免疫性肝炎など多くの合併症がみられます。一方関節リウマチ、SLE、強皮症など他の膠原病を合併しやすいこともシェーグレン症候群の特徴です。また教科書的には易疲労感、集中力低下、気分不安定などの不定愁訴をもつ人は30から80%いると書かれています。

シェーグレン症候群における唾液腺超音波検査の感受性は50から70%くらいではないかと推測しますが、一方特異性はおそらく90%以上ではないかと考えています。

唾液腺超音波検査は被爆や侵襲性のない医療安全的にすぐれた検査であり、ガムテスト同様診療所レベルでおこなえる検査です。原因不明の発熱、リウマチ類似の関節痛などがあれば乾燥症状がなくとも唾液腺超音波検査をスクリーニングとしておこなうことをおすすめします。